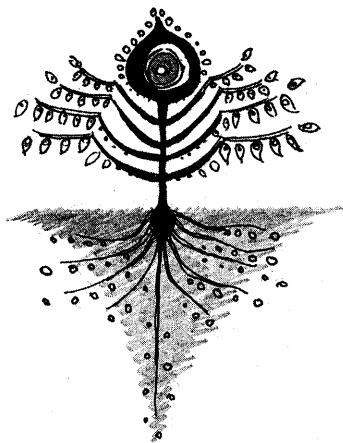


## ミニ四駆流行情

秋田 輝喜

最近、町のおもちゃ屋の前に「ミニ四駆今週入荷」とか、「いついつ発売」とかいうちらしを見ることが多い。ミニ四駆、これは、T社から発売されている組み立て式四輪駆動プラモデルの総称である。四駆というように、モーターからギヤを使い、後輪と同時に前輪を動かすという方法で、四つの車輪が同じく前進運動を行うというシステムをとっている。

ミニ四駆は、いつ頃から子供達の間で流行りはじ

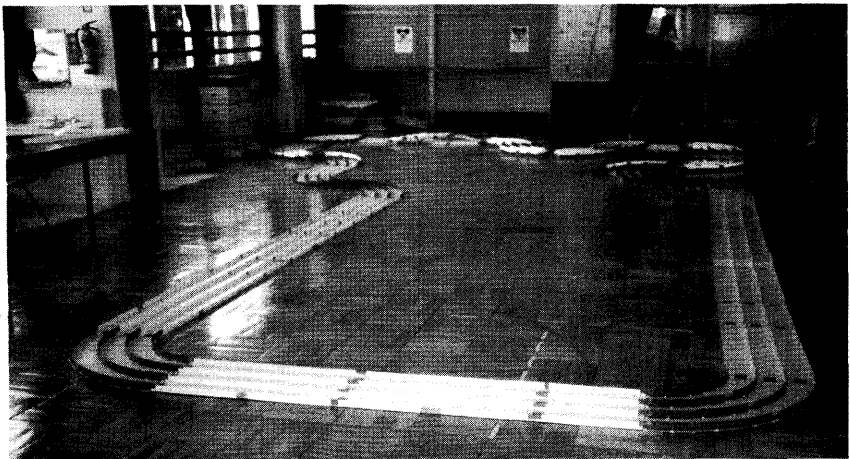


めたのであろうか。昭和六十二年頃、一部の子供達の間で行われていたが、そのころは、ミニ四駆のキットが品切れになり、購入するまでに何日もかかるといった話は、あまり聞くことがなかった。子供達は、作り上げた車を並べては、走らせていたが、レースなどと言えるものではなかった。

ところが、ミニ四駆のことが、小学雑誌などで取り上げられ、塗装もオリジナルなものが増えてきた。町の模型ショップの中には、店主が作ったサー

キットも現れ、毎日、時間を決めてレースをしたり、日曜日ごとのグランプリレースなど行うところも出はじめた。また、ミニ四駆キット製造会社からは、自在に組み立てられるプラスチックのサーキットセットも市販されるようになり、ミニ四駆の流行の一翼を担った。子供達は、キットに組み込まれたモーターではあきたらず、より早く走るために作られた、ハイパワーモーターや、ニッカド電池、転倒防止用のスタビライザーボール、側壁にタイヤがぶつからないように配慮されたローラーキットも発売されるようになった。

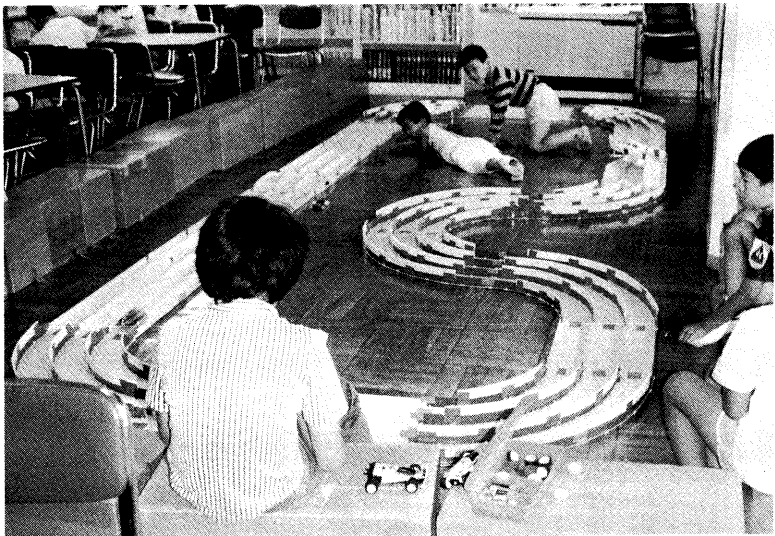
子供達は、なぜこれほどミニ四駆に夢中になったのであろうか。従来までの車の玩具と言えば、ミニカーが知られている。これは、過去から未来まで、実在のものから空想のものまで、ほとんどの車を鋳型のプレスで作り、オリジナルの塗装をして市販されている。ここでは、現在のようなミニ四駆ほどのブームはなく、子供達が成長の中で通る遊びの一つ



▲ ミニ四駆のコース

としてとらえられていた。ミニカーは、そのもの本来のオリジナリティーを変化させて遊ぶものではなく、ごっこ遊びの中で、あるいは、コレクションの一つとして、子供達それぞれの嗜好の中で選ばれたものであった。現在でも幼児から小学校低学年ぐらゐまでは、ミニカー遊びを行っている子供達も少なくない。大人の中にも、温故知新ではないが、一九五〇年代、一九六〇年代とさかのぼり、ミニカーを収集している方もおられるようだが、子供達の遊びとは、子供達のミニカー遊びとは、ちがった動機づけによるものであろう。

ミニ四駆の魅力について子供達に話を聞いてみたことがある。ミニ四駆で遊んでいる年齢層の中心は、十歳〜十二歳の男子、学年で言えば、五・六年生が主体のようであった。ここで興味深かったのは、三・四年生でも数多くのミニ四駆ファンはいるが、それぞれ組み立てたミニ四駆に個性があまり感じられない。五・六年生になると、自己の個性が組



▶ 児童館のコースで遊ぶ

み立てられたミニ四駆のすみずみに感じられる。こ  
 こにはレースに勝とう、速く走らせたいということ  
 はもちろんのだが、自己の個性を主張したい、見  
 せたいという願望が強く感じられる。そのため、塗  
 装に時間をかけたり、部品の交換がほどこされてい  
 るものが多い。このように、マニアックな部分と、  
 誰でもが親しめる部分があるから、子供達の中にも  
 受けいれられ、ひろまったのではないだろうか。ま  
 た子供達にとって、ミニ四駆の価格が手頃でおこづ  
 かいを少しためれば、あるいは、範囲の中で買え  
 る、部品もそろえられるといった所も、大きな魅力  
 となっている。電子ゲームのように、遊ばれるので  
 はなく、遊べる、自己主張が大きく出せる。手の中  
 に乗り、愛玩できる、この部分は、子供・大人に限  
 らず共通している所で、手の中に入る・持てると  
 いった物への人間の愛着は、歴史的にも、心理学的  
 に見ても顕著である。

このように、子供達の遊具の流行を見てみると、



◀ ミニ四駆大会。自分の愛車をもちよって競う

値頃感の強いもの、愛玩できる物が、その時代々々の主役を握っているようである。電子ゲームの流行や、ラジコン四駆などにより、この傾向に変化をみせてはいるが、本質的な部分は、大きく変わっていないようである。また大人から子供へと流れていた流行のパターンも、現在では、逆行している部分も多くみられる。ここには、子供達の情報量の増大という

## 遊びの中の電車

西原 彰宏

問題も多分にふくまれている。

ミニ四駆の六〇〇円という価格が、高価なものであったかどうかは、それぞれが成長し過去を振りかえった時、自分自身の想い出の中にどれだけかわっていたかにつきるのではないだろうか。

(板橋区大原児童館)

